

---

昴

yoshina

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

昴

### 【Nコード】

N4692C

### 【作者名】

yoshina

### 【あらすじ】

平次とある猫の奇妙な話。服部の日（8月10日）に合わせて書きました。前作「完全犯罪」並みの含みと「夢をみる少年」並みの後味の悪さがあります。ご注意ください。

猫を飼う事になった。

とは言っても、ペットショップで購入したわけではない。

捕まった加害者の男性が飼っていた猫が、なぜか平次に懐いて離れなくなってしまったのだ。

茶と黒のトラジマと白い毛の部分が合わさったトラ猫のメスである。

飼い主が医師で、上質な環境で育つたらしく中々品のある気配を持っている。

本当なら自分の足からひっぺはがして警察に預けるつもりだったが、その猫が事件の証拠を見つけたことを知り、興味を持った平次はそれを連れて帰ることにした。

「昂、のび飯やぞ」

元の飼い主であった加害者が名付けた名前そのまま呼ぶ。

メス猫にしては少し勇ましそうな名前だが、五月生まれだからそう名付けられたらしい。

部屋の隅で丸まっていた、その五月生まれの品ある”彼女”はとことこと、平次の置いた皿のところまでやってくる。

実はこうやって昂が大人しく寄って来る人物は限られていた。

平次と、彼に似ている母親の静華。

この二人にだけ自ら近づいて足元に頬を摺り寄せることがよくあった。

「ホンマ平次が好きやねんなあ、この子」

と、少し悔しそうに和葉は以前、自分にちつとも寄って来ない昴を遠目に述べている。

平次はその時元飼い主の顔を思い浮かべ、「そっぴやあの男も俺とおんなじように結構目鼻がくつきりとした顔立ちやったな」と納得したものだ。

昴が服部家に来てから一ヶ月ほどたったある日。

大阪郊外の某倉庫で集団自殺が行われた。

十畳ほどの倉庫の中で五人の男女が睡眠薬を飲み練炭自殺を図ったのである。

ネットで自殺志望者を募り一緒に死んだらしい。

発見者の男の悲鳴を偶然聞いた平次は、すぐさま駆けつけた。

そして現場を見て彼は驚く。

遺体ではなく、その近くにいた昴にだ。

何でそんなところにいるんだと聞いても答えがわかるはずもない。ただ昴は遺体を見て、次に平次を見て、ふいと踵を返し去っていく。

数時間後家に戻ると、ちゃんと昴は帰ってきていた。

どこかで水を浴びてきたのか、さっぱりとした毛並みで平次を迎えた。

平次が事件現場に駆けつけ、なぜかその場にいる昴に会う。

昴は彼がやって来たのを見ると、家に帰った。

血なまぐさい現場にいたことを汚らわしいと思うかのようになど、こかで水を浴びたであろう姿で、飼い主を玄関で出迎える。

「こんなことが数回続いた。」

流石に妙だと思った彼は、元飼い主の加害者のいる留置所まで行った。

「あの猫は一体何だ」と聞くために。

聞かれた男はにやりとしてガラス越しにこう答えた。

「あいつは、飼い主が本当にしたいことをするんや」

俺が飼っていた時は、俺が殺したあの女の手首に噛み付いたことがあったな、と付け加えた。

事件現場に行つて何もせず、水を浴びてから家に帰る。

遺体は見ても、推理はしない。

現場は見たいが、汚らわしい。

「……事件を歓迎して、拒否もしてるんか？」

留置所から帰る道、平次は自問したがわからなかった。

それから数週間後。

今度は女のバラバラ遺体の一部の捜索をしていた。

警察が捜していたが、頭部だけが見つかっていなかったのだ。

平次も自主的に捜査に乗り出した。

今まで見つかった複数の体の部分の発見場所から推理して、とある川べりの草むらの中で汗まみれになりながら探す。

暫くして、川淵ぎりぎりのところで黒いビニール袋に包まれていた女の頭部をついに発見した。

そこには、昴もいた。

「昴……」

平次がぼつりと呟くと、”彼女”はその頭部を後ろ足で蹴ってどぼんと川に落としてしまった。

人の頭が、長い髪の毛を水面に浮かべ下流へゆつくりと流されていく。

異様な光景に愕然として昴を見た。

彼女はにやあと鳴いて川に飛び込んだ。

そしてすぐさま出てきて体をぶるりとさせ、艶やかな毛並みを見せ付けた。

いつもここで体を洗って帰宅していたのだろう。

汚れを落とし、日光できらきら光る水滴を背に乗せしゃんと立つ。

次にもう一度平次に向かって昴は鳴き、彼の横を通り過ぎていった。

恐らく家に帰るのだ。

去る彼女を一瞥だけした平次は、追いかける気がないのか、遠のいてゆく頭をぼんやりと眺める。

昴にせつかく見つけたものを蹴落とされたが、不思議と腹立たしさは無かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4692c/>

---

昴

2011年1月18日05時07分発行